

連載 (供覧) いはひまつりのみち

宗教は人を殺し、祭祀は人を生かす  
世界平和のための祭祀を復興させる

## 第二十七回 反天皇の浄土真宗教団

南出喜久治 (令和 7 年 10 月 1 日記す)

ちちははと とほつおやから すみめおや やほよろづへの くにからのみち  
(父母と遠つ祖先から皇御祖八百万神への国幹の道)

明治 9 年 11 月 28 日に、明治天皇より親鸞聖人に「見眞大師」の大師号の謚号が勅賜されました。これは、東本願寺の真宗大谷派（大派）と西本願寺の浄土真宗本願寺派（本派）との両本願寺から太政官に対し働きかけた成果だとされてゐます。

ところが、大派は、昭和 56 年に、戦争協力を含め国策に追従した過去への反省の視点からなどとして、「見眞大師」の称号の使用をやめることを決定したと発表しました。この不使用の決定は、本派についても同じです。

ところが、「見眞」の額は、今もなほ本願寺の本堂に掲げてあります。これは、門徒への言ひ訳や観光者向けの「観光資源」として活用するものに外ならず、聖俗二諦論に藉口して「見眞額」を掲げ続けるといふ詭弁を弄してゐるのです。

それでは、蓮如上人の「慧燈大師」の謚号はどうするのでせうか。しかも、蓮如上人によつて本願寺は封建領主化したといふ理由で新宗憲に掲げる「本派正依」の聖典から蓮如上人の御文や改悔文などを排除して抹殺してしまつたのです。

これによつて、大派の内局（政府における内閣）は、宗祖親鸞聖人と蓮如上人を排除し、伝統を破壊した内局教団へと変容したのです。

門徒の政治的意見は様々であるにもかかはらず、内局が特定の左翼的政治主張を表明して、それを門徒に強制し、あるいは奨励し、内局が左翼的政治結社化してゐることは、今や動かしがたい現実となつてゐます。

大谷家からクーデターによつて一切の権限を掌握した内局は、年間 120 億円もの資金を手中にしてゐますが、その 60% は人件費に消えて教化布教には殆ど支出せず、専ら左翼政治運動のために費消して、このやうな事態を憂慮する良心的な門徒の声を完全に無視してゐるのです。

しかも、「真宗大谷派関係国会議員同朋の会」を立ち上げ、国会議員の選挙応援をすることの見返りに、本財団との訴訟等に対する支援を求めるといふ姑息な活動に血道を上げ

てゐます。

そして、宗教的言動は殆ど行はず、死刑執行の度に「死刑執行の停止、死刑廃止を求める声明」を出し、「日本国憲法改正反対決議」、「教育基本法改正に反対する宗議会決議」などを繰り返し、宗派の宗教活動とは無縁の左翼運動を盛んに繰り広げてゐるのです。

これは、戦前における「隠れ左翼」の立場から脱皮して、公然と左翼政治結社として表面に躍り出て変容したものであつて、これこそ「政教分離」に反するものです。

私は、大派の真宗門徒の家に生まれ、このことの経緯を知る機会があり、大派からの離脱を父母に迫りましたが、先祖からの宗教を棄教することに反対されました。そこで、父母が存命中は棄教せずに、没後において、祭祀否定、天皇否定の邪教に拉致されてゐる祖先を救出するために、当時の宗務総長に抗議した上で宗派から離脱しました。

もともと、阿弥陀信仰には不信感がありました。周囲からも異安心であると批判され続けましたが、パンチパーマの髪で、見慣れぬ顔立ちと衣装を纏ひ、はだけた姿で全身金ピカの阿弥陀如来像を見て、決して親近感は沸かず、むしろ違和感を抱き、驚愕するだけの対象でした。このやうな思ひは、仏教伝来とされる仏像伝来に立ち会つて人が感じた思ひと共通するものと思つてゐます。写真で見た曾祖父母、祖父母の面影があれば崇拝の対象としての親近感がありましたが、この違和感こそ、祭祀への気づきの第一歩でした。